

第 2 1 回昭和館運営有識者会議

日時 令和 3 年 3 月 1 0 日 (水)

1 4 : 0 0 ~

場所 T K P 市ヶ谷カンファレンスセンター ホール 5 C

○櫻井補佐 事務局です。お集まりいただきましてありがとうございます。2時から昭和館の運営有識者会議を開かせていただくということで、今回 Web での会議という形にさせていただいたところではありますが、座長の波多野先生も今回 Web で御参加になっているのですが、接続がまだ確認できておりませんので、少々お時間を頂ければと思います。現在、連絡を取っているところです。

では、会議に先立ちまして、まず今回こういう形で Web での会議という形になっておりますので、簡単に御案内をさせていただければと思います。本日の会議に Web で御参加される委員の方々には、Web 会議の利用方法について、事前にリハーサルを行って、動作確認をさせていただいておりますが、会議中にシステムの不具合等が発生したり、操作方法など御不明点がありましたら、事務局まで御連絡いただければと思います。また、御利用するに当たり、御注意していただきたい点があります。音声ハウリングしたり、マイクが周囲の音を拾ってしまうことがございますので、発言をされる時以外は、マイクをオフにさせていただきますようお願いいたします。会議中に御発言いただく際は、マイクをオンしてお名前、御発言がある旨をお声掛けください。若しくはスカイプのショートメッセージ機能を利用して、発言がある旨コメントを送信していただくことでも構いません。座長より順次、御指名をさせていただく形になります。御発言が終わりましたら、マイクをオフにして、ミュートにさせていただきますようお願いいたします。

なお、会場側で発言がある場合には、事務局よりその旨皆様にお伝えし、指名させていただきます。どうぞよろしくお願ひします。今、波多野先生の接続状況を確認させていただきますので、もう少々お待ちいただきますでしょうか。

(中断)

○櫻井補佐 申し訳ございません。今もちょっと連絡を取っているところではありますが、波多野座長と連絡がつかない状況になっております。時間になりましたので、波多野座長とつながるまでの間ですが、僭越ながら、私のほうで少し会議を進めさせていただくということでいかがでしょうか。よろしいですか。つながり次第、波多野座長には御登場いただくという形にさせていただければと思います。

それでは「第 21 回昭和館運営有識者会議」を開催させていただきます。本日はお忙しい中、お集まりいただきまして、ありがとうございます。また、本日の会議は、新型コロナウイルスの感染状況を踏まえ、可能な限り Web 会議にて御参加をしていただいております。いろいろと御不便な点等あると思いますが、御理解、御協力をお願いできればと思います。

本日の出欠状況ですが、委員 8 名いらっしゃる中で、4 名が Web での御参加、そのうち波多野先生が現在つながっていないという状況になっております。また、増田先生が会場へ御出席をしていただいているところです。なお、鈴木先生、藤田先生、山田先生については、本日御欠席になります。また、オブザーバーといたしまして、しょうけい館から 1 名の御出席を頂いています。本日は会議の傍聴が 1 名いる予定ですが、今のところいらっ

しゃっておりませんので、よろしく願いいたします。

では、私のほうから昭和館運営有識者会議の委員の御紹介をいたします。資料の2枚目、委員名簿に沿いまして、御紹介をさせていただければと思います。つきましてはWebで御参加の方も、マイクのチェックも含めまして、一言自己紹介をしていただければと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。それでは、まず上安平冽子様。

○上安平委員 上安平でございます。こんにちは。私はずっと放送の制作に携わっていました。放送番組のディレクター、プロデューサーをしていたのですが、最近気になるのは、昭和というのがとても古くさく描かれているということなのです。多分、大正も明治もごっちゃになってしまっているようなところがあるので、そういう中で昭和の実態というのをちゃんと正確に伝えるということは、大きな意味を持つものだと思いますので、昭和館の頑張りに期待しております。

○櫻井補佐 続いて神津カンナ様。

○神津委員 神津でございます。新型コロナの流行で本当に不自由さをいろいろ感じている方もたくさんいるかと思うのですがけれども、私は両親が89歳の作曲家と、もうすぐ87になろうとする女優と、2人が400m離れた所にいるので、本当に往生しています。それで、両親ともに働いているので仕事もするし、コロナのこともあるので、結構大変なんですけれども、その両親の所に食べ物を届けに行ったときに、「これはコロナとの戦いだからね」と気楽に言いましたら、父に「ドアを開けて空から爆弾が落ちてくるようなことは一個もない、戦いという言葉は簡単に使うな」と怒られました。母からは「一夜にして価値観がひっくり返るということは、戦争のときに体験済みなので、コロナそのものの大変さというのは分かるけれども、一夜にしてひっくり返ることというのは、あなたには分からないことかもしれないけれどもあるのよ」みたいなことを言われて、ああ、昭和の人って、戦争をくぐった人は強いなというふうに思いました。ですから、昭和館の在り方というものも大切なのだなということ、ちょっと別の観点なのですが感じたということをお伝えしようかと思いました。よろしく願いいたします。

○櫻井補佐 ありがとうございます。続いて、増田弘様。

○増田委員 座ったままでよろしいですか。増田でございます。立正大学で近代日本政治外交史を教えております。2年ほど前に南方の、東南アジア方面の日本軍並びに民間人の復員引揚げの本などを出させてもらいましたが、やはり戦時期と戦後期、まだまだ空白が多々あると思っております。と同時に私は、昭和館さん、しょうけい館さんと御一緒に、毎年3館連携でいろいろお世話になっております新宿の平和祈念展示資料館の名誉館長も兼ねておりますので、その点からも今日、この会議を大変、楽しみとっては失礼であります。注視している次第でございます。今日は直接、羽毛田館長ともお久しぶりでもありますので、直接参加させていただいたと、こういうことでございます。どうぞよろしく願いいたします。

○櫻井補佐 引き続きまして、松井かおる様。

○松井委員 江戸東京博物館の松井でございます。この後の議事で、コロナで減収というか、来館者も含めて、非常に博物館は厳しい状況ということのお話があるかと思えます。今後、今まで考えていたようなインバウンドとか、そういったことは望めないと思えます。それは私ども江戸東京博物館もそうですけれども、今後の博物館の在り方というのを考える上で、昭和館さんやしょうけい館さんは、特に今後、先ほどの神津さんのお話にもありましたとおり、超高齢社会にますますある一程の年限まではいくわけですし、介護の需要というのは高まってくるわけです。上安平様のお話にもありましたけれども、その中で介護に従事するこれからの若い人たちが、介護する、利用者と呼んでいますけれども、そういう人たちに寄りそってとか、その人たちの履歴を知って介護するものなんだというようなことをよく言われるわけですが、聞き取りをしてもやはり社会背景、使っていた道具とか、そういうものが分からないと本当のことが分からないわけで、そういったことを実感できる場として博物館というのは非常に私は有効なものだと思っていて、単なる見学ではなく、そういったところをきちんと使っていくということができないのではないかと思います。

最近、欧米の事例で、森林浴というのは、森林を歩くということがどのように、例えば脈拍とか、いろいろ科学的に有効なのかということの知見が 30 年間ぐらいあるそうなのですが、九州の大学の先生が博物館浴という名前で、高齢者の方が博物館や美術館に行つて、科学的にどのように役立つのかというような研究も始まっております。そういったことも踏まえて、昭和館の在り方というのが、今後非常に存在感としてはあるものになっていくのではないかと期待しております。どうぞよろしく願いいたします。

○櫻井補佐 ありがとうございます。引き続きまして、前回開催以降、厚生労働省社会・援護局の人事異動がございましたので御紹介します。橋本泰宏社会・援護局長です。

○橋本局長 橋本でございます。よろしく願いいたします。

○櫻井補佐 続いて、伊澤知法社会・援護局援護企画課長です。

○伊澤課長 伊澤でございます。本日はよろしく願いいたします。

○櫻井補佐 なお、本日、岩井勝弘大臣官房審議官は国会対応のため欠席とさせていただいております。また、橋本局長は他の業務のため途中退席とさせていただきます。御了知いただきますよう、よろしく願いいたします。では、橋本局長から御挨拶をお願いできればと思います。

○橋本局長 改めまして、厚生労働省の社会・援護局長の橋本でございます。どうぞよろしく願いいたします。第 21 回の有識者会議の開催に当たり、一言御挨拶を申し上げます。

委員の先生方におかれましては、日頃から昭和館の運営に当たりまして、御尽力を賜っております。厚く御礼を申し上げます。また、本日も大変お忙しい中をこの会議に御出席、参加を賜わりまして、誠にありがとうございます。

昨年、令和 2 年を振り返ってみますと、先の大戦が終わって 75 年が経過した年であっ

たわけですが、ある意味では戦後最大の危機といっても過言ではないほど、苦難に満ちた1年間であったとも思います。新型コロナウイルスの感染拡大によりまして、昭和館においても、年度当初には、一時的な休館を余儀なくされましたし、営業再開後も来館者が大幅に減少するなど、正にコロナに翻弄され続けた1年であったというように思います。さはさりながら、戦時中あるいは終戦直後の時代を知る世代というものが、だんだん高齢化していく中で、先の大戦の記憶を風化させることなく、次の世代に承継していくことの重要性が、ますます高まってきていると思います。戦没者遺族をはじめとする国民が経験した戦中・戦後の生活上の労苦を次の世代に伝えていくことを目的とする昭和館の活動が、ますます重要なものとなっていくというように思います。たとえ戦闘あるいは空襲、その他様々なそういったことを御自身が直接自分自身で体験するという形でなくても、様々な形で先の大戦とその下での国民の苦しい思いというものを、高齢の世代の方々から若い世代の方々へと受け継いでいって、それを日本人としてリレーをしていく。それは本当に末永く続けていかなければならないことだと思えます。個人の体験ということを超え、そしてまた時間と世代というものを超えて、日本人の体験としてこれをつないでいくということが欠かせないだろうと思っております。私ども厚労省においても、次の世代への継承ということをも更に強化していくために、平成28年度から戦後世代の語り部育成事業を実施しております。これにより研修生の育成を行っているわけですが、令和元年に研修を終了された方から、戦後世代の語り部という形で、講話活動を開始していただいております。コロナの影響でなかなか満足のいく活動ができなかったという部分もありますが、講話活動を今後も継続してまいりたいと考えております。

本日は、昭和館の令和2年度の事業報告、令和3年度の事業計画案について、御意見を頂くことになっております。昭和館の運営が、このコロナの苦難というものも乗り越えて、より充実したものとなりますよう、皆様方の幅広い視野から、忌憚のない御意見を頂ければ有り難いと考えております。以上、簡単ではございますが、私からの挨拶とさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

○櫻井補佐 ありがとうございます。続いて、昭和館の羽毛田館長より御挨拶をお願いします。

○羽毛田館長 昭和館の羽毛田でございます。皆様方におかれましては、昭和館の運営について、平素より御指導、御鞭撻を賜っておりますことを、まずもって御礼を申し上げたいと思います。

今、橋本局長からの御挨拶にもありましたように、御多分に漏れず、昭和館も新型コロナウイルスのパンデミックで大変な影響を受けており、目下、苦闘の最中であります。1日も早い収束を待ち望んでいるところです。新型コロナウイルス感染症の拡大の防止ということで、去年は2月28日から臨時休館し、6月2日から感染防止対策を講じた上で再開いたしました。開館後もイベントあるいは研修等の活動について、中止あるいは延期等の対応をせざるを得なかったようなこととございます。こういったことの結果、令和2年

度の入館者数は2月末現在で6万人という惨憺たる結果で、私どもとしても大変残念に思っているわけですが、そんな状況になっています。実情はこういう非常に厳しい条件下にあります。新型コロナウイルスの感染防止に万全を期しながら、今、局長からもありましたように、戦後75年を経て、ますます重要な局面を迎えております昭和館の役割というものをきちっと果たしていくために、これから展示内容の充実、あるいは情報発信の面での工夫というようなことも含めまして、引き続き創意工夫を凝らしたいと考えております。

3月13日から、ちょうどこういうコロナの流行という時節でもありますので、「丈夫なからだで病を防げ!～健康づくりと感染症予防～」という特別企画展を実施することにしております。また、3月20日から写真展で、山田風太郎の不戦日記を下敷きにした「マンガを通して知る戦時下の暮らし」という企画を予定をしているところでございます。

私どもとしては、今後とも戦中・戦後の労苦を後世に伝えるために、適切に館の運営を図ってまいりたいと考えておりますので、本日は皆様方の忌憚のない御意見を頂きますよう、よろしくお願いを申し上げる次第でございます。本日はよろしくお願ひいたします。  
○櫻井補佐 ありがとうございます。それでは、申し訳ございませんが、これより橋本局長は退席をさせていただきます。

では、資料の確認をさせていただきます。お手元にあります資料、Webで御参加の方については、事前にお送りした資料の確認をお願いいたします。配布資料として資料1「令和2年度昭和館運営事業の実施状況について」、資料2「令和3年度昭和館運営事業計画案について」、資料3「第19回昭和館見学作文コンクール」、資料4「第13回昭和館中学生・高校生ポスターコンクール」、資料5として「令和2年度常設展示室展示替えの概要」、御報告という形です。資料6「特別企画展展示構成(案)」、資料7「写真展展示構成(案)」、最後に資料8「令和3年度昭和館運営事業計画表」です。また、参考資料として一番下に「昭和館運営有識者会議開催要綱」を配布しております。全てお手元にご覧いただけますでしょうか。よろしいでしょうか。

ここから議事に入らせていただくことになるのですが、まだ波多野先生と連絡がついておりません。時間も過ぎてしまいますので、波多野先生がつながり次第ということで、それまで私のほうで少し議事の御案内をさせていただくということでよろしいでしょうか。ありがとうございます。それでは、議事を進めさせていただきたいと思っております。

まず、お手元の議事次第にありますように、本日は、第1に令和2年度昭和館運営事業の実施状況について、第2に令和3年度昭和館運営事業計画案について御議論いただきたいと思っております。では、初めに、令和2年度昭和館運営事業の実施状況について、説明をお願いいたします。

○井上総務部長 昭和館の井上より説明させていただきます。資料については事前に送付しておりますので、質疑時間を考慮し、強調したい箇所を中心に説明いたします。必要に

応じて補足説明させていただきます。

資料 1 により、令和 2 年度の実施状況について御説明します。1、昭和館の入場者の状況についてです。先ほど来御説明等を頂いておりますが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、令和 2 年 2 月 28 日から臨時休館をいたしました。6 月 2 日から、博物館ガイドライン等を参照し、できる限りの新型コロナウイルス感染防止対策を講じたところです。6 月 2 日から 1 日 4 サイクル、あるいは団体入場は認めない形で、入館を許可する形になっておりました。10 月からは、団体についても 1 回 100 名単位で受け入れるということで、緩和措置を行ったところです。なお、開館後も、新型コロナウイルス感染拡大防止対策を徹底するというので、イベント、研修等の開催については、中止又は延期等の対応を行いました。6 月から 1 月末の総入場者数は、5 万 7,487 人です。去年同期比 82.3% の減となっております。各展示室の入場者の内訳については、資料 1 の下段に記載しておりますので、御確認をお願いします。

資料の 2 ページから 6 ページには、入場者の状況を個々の状況が分かるようにまとめて記載しております。詳細な説明は、時間の都合で割愛させていただきます。

7 ページをお開きください。広報活動の実施状況を記載しております。最初に、昭和館事業の PR 活動等、広報資料の送付等、『昭和館だより』の発行、昭和館の刊行物の発行について記載しております。例年の活動に準じて対応しているところです。広報活動の詳細については、資料の 8 ページから 10 ページに個々に整理しておりますので、御確認をお願いいたします。

続いて、11 ページをお開きください。こちらでは昭和館ホームページ、SNS について記載しております。昭和館のホームページの状況を御説明しますと、本年度のアクセス件数は令和 3 年 1 月 31 日現在で、18 万 8,983 件ということです。また、SNS については、現在、Twitter、Facebook、YouTube を実施しておりますが、それぞれのアクセス件数は資料に記載のとおりです。

続いて、3 の来館促進対策です。常設展示室の入場無料については、例年のように 8 月 15 日に入場無料を実施しております。それから、第 19 回昭和館見学作文コンクールについては、新型コロナウイルスの影響を受けまして、団体来館校が例年に比べて大幅に減少したということもあり、合計 6 作品の応募を頂いております。また、第 13 回昭和館中学生・高校生ポスターコンクールについては、令和 2 年度は 113 作品の応募を頂いております。教員のための博物館体験については、資料の 12 ページにかけて記載しておりますが、新型コロナウイルス感染防止のため中止といたしました。

資料の 12 ページは、貸出キットの貸出状況、紙芝居の定期上演会、こども霞ヶ関見学デーを記載しておりますが、こちらにも新型コロナウイルス等の影響もありまして、紙芝居については昨年 11 月、今年の 3 月の 2 回を予定しているところです。こども霞ヶ関見学デーは中止としております。13 ページの展示事業は、常設展示室の展示替えについては、この後、資料 5 を用いて学芸担当より説明いたします。

続いて、特別企画展の「SF・冒険・レトロフューチャー～ぼくたちの夢とあこがれ～」については、新型コロナウイルス感染防止対策のため、公開できないまま終了となりました。昭和館としては、同特別企画展の映像を編集しまして、ニュースシアターで上映するとともに、YouTube で一般の方々にも御紹介するという対応をしております。

続いて、戦後 75 年特別企画展については、14 ページを御覧ください。占領から独立までの軌跡については、入場者数が 5,948 人でした。「丈夫なからだで病を防げ!～健康づくりと感染症予防～(仮称)」については、この後、資料 6 を用いて学芸担当より説明いたします。

続いて、巡回特別企画展については、岩手県と鳥取県で開催しました。コロナウイルス対策等の工夫をしましたが、岩手県が 1,293 名、鳥取県が 4,711 人の方に来場いただいております。

16 ページをお開きください。こちらは写真展の開催状況を記載しております。戦後 75 年の企画として、「東京情景-師岡宏次がみた昭和(第 1 期、第 2 期)」ということで、令和 2 年 3 月から令和 2 年 12 月まで、2 期に分けまして、合計 1 万 8,972 人の方に入場いただきました。次に、「マンガ『風太郎不戦日記』を通して知る戦事下の暮らし」については、この後、図書情報担当より説明をいたします。

次に、17 ページに記載の資料収集についてです。実物資料の収集状況、関係資料の収集状況については、資料に記載のとおりです。18 ページでは、戦中・戦後の労苦を伝える語り部育成事業について記載しております。語り部については、育成事業として、1 期生は 7 名が語り部として委嘱を受け、講話活動等を実施しております。2 期生は 7 名が近日中に研修を修了する予定です。3 期生については 7 名が研修に参加しておりますが、令和 3 年度に研修を修了する予定です。語り部の活動事業として、館内での定期講話会、外部からの語り部派遣依頼による派遣講話という形で実施しておりますが、実施状況は資料に記載のとおりです。19 ページは情報検索システムの充実についてですが、図書・雑誌の装備及びデータ入力以下、写真の公開まで記載しております。

20 ページから 21 ページは資料の公開についてです。こちらにも新型コロナウイルス感染防止対策としていろいろと工夫をまいりました。ニュースシアターあるいは映像資料の提供状況、資料公開コーナー等で工夫を重ねてまいりましたが、コロナの影響が大きい状況がございました。

21 ページから 22 ページにかけて、関係施設との連携について記載しております。22 ページには、更に昭和館運営専門委員会の開催状況も記載しておりますが、こちらは第 1 回は 6 月、第 2 回は今年の 2 月に、いずれも書面決議という形で実施いたしました。

23 ページから 31 ページにかけて、アンケート結果について記載しております。時間の都合で、詳細な説明は割愛いたします。続いて、学芸担当より資料の説明をさせていただきます。

○佐藤学芸課長 資料 5 を御覧ください。こちらでは、令和 3 年 1 月 5 日から 15 日にか

けて行った、第 10 回常設展示室展示替え工事について御報告します。資料を 2 枚めくっていただくと、参考として委員会提出案レイアウト図がございます。当初、このように L 字だったブースユニットをニの字にするということで計画しておりましたが、実質的な作業に入り検証していったところ、L 字からニの字に変えることで耐震強度が維持できないのではないかということと、青空教室の人形ジオラマを移動させるという予定もありましたが、団体来場者が来た際の動線の妨げになるというおそれがございましたので、今回、計画していたブースユニットの組替えと青空教室の人形ジオラマの展示場所の変更については、中止としました。第 5 ブースの展示スペースの拡張と階段下の演出について、階段下から全て「廃墟からの出発」というコーナーとして空間を広げるということで、展示替えを行いました。

2 ページ目を御覧ください。7 階から階段を降りてきますと、階段の踊り場の所に、玉音放送と終戦の詔勅が発せられた日の新聞を展示しておりますが、そこから降りた所に終戦後の銀座 4 丁目付近の写真を展示しております。第 5 ブースと呼んでおりますが、廃墟からの出発というコーナーの始まりを大型写真の横から始め、そちらで戦災復興についての説明を追加し、また、銀座復興絵巻という、漫画家の麻生豊による銀座の復興の様子を描いた絵巻 3 点をパネル化して展示しております。

3 ページで、展示替えに伴う資料交換の代表的な資料を 3 点紹介しております。日の丸寄せ書きについては、洋画家の川名廣喜が召集されることを受けて美術協会の仲間たちが揮毫した日の丸寄せ書き、仁丹の印が付いた資源回収箱、あとは尾張町 4 丁目、銀座 4 丁目交差点付近を日本画家の村松乙彦が描いたスケッチなどを展示しております。

続いて、資料 6 を御覧ください。こちらは今週末から開催する特別企画展「丈夫なからだで病を防げ!～健康づくりと感染症予防～」と題した展示構成となります。先ほど来、いろいろな方からお話がありましたが、現在、新型コロナウイルスによって人々の生活にも制約が出ている状況です。それで、外出自粛や体調維持など、健康への関心が高まっているということで、今回は昭和の時代の健康づくりと感染症予防についての特別企画展を計画いたしました。全部で 3 章立てになっておりまして、「戦時体制と健康政策」「健康を求めて～運動・栄養・生活の工夫～」 「占領期の健康政策」ということで構成しております。2 ページ目に会場構成図が出ております。3 つの部屋、それぞれ 1 章 1 部屋ということで構成しております。3 ページ目からポイントごとに説明いたします。

1 の「戦時体制と健康政策」ということで、昭和恐慌による農村の疲弊や困窮が影響して、国民の体位低下や結核患者数の著しい増加を受けて、昭和 13 年に厚生省が創設されたこと、また、日中戦争の長期化に伴い、国民体力の向上を重要施策として厚生省が掲げまして、国民精神総動員運動の一環として、健康増進を呼び掛ける運動が展開されましたので、そういった様子を当時の写真や実物資料で御紹介しています。

4 ページ目の「厚生省とは」というのは、写真週報の創刊号で、見開き 4 ページにわたり、厚生省の各局、体力局、衛生局、予防局、社会局、労働局、臨時軍事援護部、それら

の業務の内容を紹介している写真週報を展示いたします。5 ページ目からが、国民精神総動員運動と健康増進キャンペーンについての資料となります。こちらは体位向上、健康増進ということで、健康週間というものが設けられまして、期間中はラジオ等でも健康生活に関する番組が組まれたり、啓蒙のためのポスターなどが作成されました。そういったポスターや、当時の健康週間の実施事項、届出用紙などを展示いたします。また、そのほか全日本健康優良児表彰ということで、子供たちの健康状況の把握と健康増進、体位向上を推進するための運動、そちらの表彰状、参加メダルなどを展示いたします。

6 ページを御覧ください。今、東京都でも新型コロナウイルス関連のカルタがポスターになって、いろいろな所に掲示されておりますが、こちらの健康漫画カルタも、昭和 16 年に東京市厚生局児童課と全日本小物玩具卸商連合会との共同主催で製作されたものです。こちらは今の新型コロナウイルス対策で言われているような換気や手洗いというようなことが、同じように、子供にも分かりやすい言葉と絵で紹介されているカルタとなります。

7 ページをお開きください。こちらは国民体力の向上ということで、体力章検定、国民体力法ということで、徴兵検査を受ける前の人々の体力管理が行われるようになった様子とか、あとは国民の体位向上と国民意識の向上、国を挙げての体育大会、明治神宮国民体育大会とか日本体操大会といった大きな大会が行われていますので、そちらに関連する資料を御紹介しています。

10 ページから第 2 章の説明です。当時、感染症として猛威をふるっていたのが、国民病とも言われた結核です。こちらの死亡者が昭和 9 年の段階で 13 万人を超えて、昭和 10 年からは死亡原因の第 1 位となっております。その後も死亡原因としては第 1 位なのですが、兵役とか工場への出稼ぎなどによる集団生活で感染の機会が多くなったことにより、女性よりも男性の感染者数が増えることがありまして、国を挙げての結核予防の運動が行われるようになります。

11 ページ、12 ページでは、結核予防関連の資料を御紹介しております。兵役に就いたときに結核にかかった人ということで、花森安治の関連資料も御紹介いたします。満州の部隊に配属されていた花森が、定期健康診断で胸部に異常が見付かり、内地に送還されることとなります。その後、療養生活を送りますが、結核を理由に除隊となり、その後は国策宣伝などに従事するのですが、花森安治の従軍手帳に健康診断時の記録、「肺浸潤 3 月 20 日決定」というような記載がありますので、こちらを世田谷美術館からお借りして展示いたします。

12 ページ、13 ページでは、当時、家庭で使われていたような医療器具などを御紹介しています。14 ページからは、日中戦争を契機にラジオが普及して、ラジオ体操という国民的な体操が普及していった様子を御紹介しています。国民心身鍛錬運動の中でも、ラジオ体操の実施というのが奨励されていた様子などを御紹介しております。

16 ページからが、食料事情と栄養事情ということで、健康づくり、感染症予防のために、とにかく免疫力を上げて健康な体を保つということしか一般の人々にできることはな

いので、戦争が長期化して食糧が不足していく中でも、できる限りいろいろな品目を食べて栄養を摂って、丈夫な体を保つことが奨励されます。その中で玄米食なども奨励されていきますが、消化と吸収がよくないため、こちらには賛否両論がありました。こちらについても、白米食の廃止についてのパンフレットとか、当時の献立表などと併せて紹介したいと思います。食料統制を強化しても、なかなか食糧事情は向上しませんでしたので、国民の栄養不足の状態は続きますが、何とか手に入る食糧で工夫をして食事を作ることが、いろいろな形で奨励されています。ただ、栄養状態の改善が見られないまま、この後、終戦を迎えることとなります。

17 ページ、18 ページでは、様々な食糧の工夫、食べられる野草、戦時の食生活秘訣便覧など、今まで捨てていたような所まで食べる工夫を紹介している資料を展示いたします。

19 ページからが、第 3 章の戦後の状況を紹介するコーナーです。終戦後、戦時中からの栄養水準が低下していたことに加えて、海外からの引揚げや復員によって新たな病原菌が持ち込まれたこともあり、発疹チフス、痘瘡などの急性伝染病患者が急増しました。このため、港での検疫や DDT などによる消毒など、感染症対策が行われていました。戦後に増加した法定伝染病の患者数などはグラフで紹介しまして、19 ページの右下の写真を御覧いただきますと、都内の 8 つの駅で予防注射が行われていた様子を紹介しています。このとき、都内通勤者は乗降時に定期券と一緒に注射済証を調べられて、予防注射が済んでいない者は乗車を断られることがあったという状況です。

20 ページを御覧いただきますと、DDT による消毒の様子、当時、海外引揚者・戦災者の栄養不足に基づく身体諸病状の発現ということで、引揚者・戦災者が栄養不足だけでなく、それに伴っていろいろな疾病を発症していた状況の調査の記録などを紹介しております。

21 ページを御覧ください。戦中の結核の状況というのも、第 1 章、第 2 章で御紹介しています。終戦後も、結核というのはまだまだ患者数の多い病気ではあったのですが、治療薬のストレプトマイシンが輸入され、国産化されて普及していったことなどにより、昭和 26 年の段階で、結核による死亡者が 10 万人を下回り、死亡原因 1 位だったものが、ここで 2 位になっています。それから先も、まだしばらく結核予防については、いろいろなキャンペーンや対策が取られておりました。結核についての関連資料ということで、太宰治の『パンドラの匣』を紹介しております。こちらは、初版本を日本近代文学館からお借りして紹介いたします。こちらは結核療養所を舞台に繰り広げられる作品なのですが、太宰の読者である実際の結核患者だった方の病床日記が基になっている作品ということで、御紹介いたします。

ストレプトマイシンなどが輸入されて、普及していく状況なども、婦人雑誌などでも紹介されておりますので、22 ページ右下の『主婦之友』などの記事も紹介いたします。

23 ページからが、戦後も食糧事情がなかなか改善されない食糧難の状況でしたので、そちらの状況を説明しております。1,000 万人餓死説が流れるほどの食糧難の時代でしたので、そのときの一般住民の栄養調査、こちらは 23 ページの右下の資料ですが、GHQ が

日本政府に指令した栄養調査に関する覚え書きで、調査の方法などが記載されています。

24 ページからは、食糧援助、輸入食糧に関する資料を紹介しております。こちらで、輸入食糧、あと動物性タンパク質などをより摂っていくようにということで、栄養改善運動が行われていた様子を紹介します。

25 ページが、戦後の子供たちの健康に関する資料を紹介するコーナーとなります。戦争によって子供たちの体位も低下しておりまして、先ほど申し上げたとおり、食糧難の状況で、子供たちの健康を維持するため、健康状態を上げるためということで、学校給食が開始されます。その当時の給食の献立表とか、4年の学習年鑑などで、バター生産量の推移などが紹介されていまして、そちらで乳製品とか、牛乳やバターがより多く消費されるようになった状況などを紹介いたします。

26 ページになりますと、当時、虫下しを飲んでいる子供の写真と、学校での寄生虫の駆除、必要であれば虫下しを飲ませることを伝えた寄生虫駆除についてのお知らせなどを展示いたします。当時の6年生の教科書では、「健康なからだ」という項目の中で、伝染病、寄生虫について詳しく紹介されていまして、伝染病や寄生虫というものが子供たちに身近なものだったということが分かる単元になるかと思えます。

28 ページは、今回の健康づくりとか感染症予防に関する映像資料をリストに挙げていますが、こちらは会場の外で上映いたしますし、会期中、1階のニュースシアターでも1番組、こういった感染症予防とか健康づくりに関するものを上映してもらうことになっています。資料5、資料6に関する説明は以上です。

○坂尻図書情報部長 図書情報部の坂尻と申します。写真展について、私から説明いたします。資料7になります。今回の春の写真展については、「マンガ『風太郎不戦日記』を通して知る戦時下の暮らし」と題して開催いたします。会期は、令和3年3月20日(土)～5月9日(日)、前回同様に千代田区と千代田区教育委員会の後援を得ております。また今回は、講談社様の協力も得まして、漫画誌面の第1話～第10話、昭和20年1月～8月15日までが該当するのですけれども、そちらの10点をお借りして、所蔵写真の中から戦時中の暮らしを紹介していきたいと思っております。

漫画『風太郎不戦日記』は、作家の山田風太郎さんが昭和20年の体験を記録した『戦中派不戦日記』を、少女漫画家の勝田文さんがタイトルを改めて描いたものです。講談社が発行しております漫画誌『モーニング』に、現在も連載中です。単行本も2巻まで発行されており、夏頃に3巻が発行されると伺っております。また、こちらの漫画については、若い漫画家の方が戦時中の暮らしを描いたということで話題になり、昨年8月17日にはNHKの「おはよう日本」でも特集されておりました。昭和館では、漫画の監修に携わりまして、漫画を描くに当たって当日の様子分かる資料として、映像、写真、図書、実物資料の画像なども提供を行ってまいりました関係で、この度の写真展を企画いたしました。

『戦中派不戦日記』は当時を知る資料としては大変貴重なもので、社会科のサブテキストにすべきとおっしゃる方もいらっしゃるのですけれども、漫画の編集に携わった講談社

の方なども、現在の若い人はほとんど知らないねというようなこともおっしゃっていて、今回の写真展ではそういった若者もターゲットにできればと思います。2部構成といたしました。第1部はコミックを軸として、『風太郎不戦日記』に見る戦時下の暮らし、そして第2部は山田風太郎と同時代を生きた男子学生の生活を、「男子学生たちの青春」と題して紹介いたします。第1部は写真が30点、第2部は10点、全てモノクロになります。

それでは、写真の説明にまいります。第1部第1話については、大晦日からの空襲で始まった昭和20年元旦の情景になります。煙がくすぶる中で焼け跡を整理する様子ですとか、焼け出された国民学校に避難した人々など、全て石川光陽さんの写真になります。また、石川光陽さんは日記も記しておりまして、その日記の中で所轄の警察署員が消火活動に懸命に携わったですとか、罹災者が家の焼け跡を黙々と掘っている様子などが書かれており、光陽さんの日記も併せて第1話の所では紹介したいと思っております。

続いて第2話は、戦争の実相を報じずに戦意高揚をあおる新聞記事に風太郎さんが憤っている様子などが描かれています。写真については、ここでは戦意高揚を題材として、出征兵士の見送りを演じる国民学校の学芸会や、国民の戦意高揚を目的としたスローガンや、B29を撃墜した戦闘機の展示会などの写真を紹介しています。

続いて第3話は、風太郎さんが通学途中の新宿駅で、空襲警報を受けて防空壕に退避するシーンが描かれておりますけれども、ここでは空襲に備えた暮らしぶり、防空について紹介していきます。鉢巻きをして救護訓練をする女学生たちの様子や、迷彩塗装をした東京工業大学、現在の東工大の写真になります。

第4話が、3月10日の東京大空襲になります。惨憺たる街の様子ですとか、罹災された人々の様子、空襲による煙や爆風で目を痛めた人々の様子も描かれており、写真14では警視庁前で罹災者の洗眼を行う様子の写真も紹介しております。

続いて第5話は、新宿武蔵野館でフランス映画の『格子なき牢獄』を鑑賞するなど、芸術を楽しむ風太郎さんが描かれています。写真展の会場では、展示に関する音楽を8曲ほど流す予定ですけれども、その1つにこの映画の劇中歌の訳歌も流す予定です。ここでは、戦争の影響が芸術・文化面にも及んでいた様子を紹介してまいりたいと思っております。例えば写真15は、国策紙芝居の実演になっております。こちらは、紙芝居の草分け的存在であった森下貞三さんが『父に祈る』という作品を名古屋の松坂屋の会場で実演しているものなのですが、この森下貞三さんというのが実は現在の昭和館の定期紙芝居上演で紙芝居をされている森下正雄さんのお祖父様に当たる方になります。そのほか、イタリア映画や、傷痍軍人を看病する映画を上映する映画館の様子などの写真を紹介しております。

次に第6話は、戦況悪化に伴って食糧事情がより逼迫してきた様子が描かれております。ここでは、物資不足の生活の様子を御紹介してまいります。例えば写真18では、デパートでの代用品キャンペーン、金属やゴム、皮革の代用品などがショーウィンドーで紹介されています。写真20になりますが、空襲で消失した農商務省の倉庫に焼き米を求めて集

まってきた人々の様子になります。写真が小さくて見えづらいのもあるのですけれども、女性が多く見受けられまして、手にはバケツをぶら下げて、グループに分かれて順番を待っている様子、また、子供をおぶった女性が多く見られます。

次に第7話は、山の手空襲の様子になります。山の手空襲では、丸の内、東京駅のドーム駅舎が消失したとか、いろいろありますけれども、このときに目黒も空襲に遭っています。実は風太郎自身の下宿先が目黒にありまして、そちらも空襲に遭って焼け出されています。ここでは、山の手空襲の被災状況を紹介しています。例えば22番、焼け跡での告別式なのですけれども、こちらをよく見ると棺台が畳で代用されていたり、祭壇はよく見ると足踏みミシンが使われていたりというようなところが見て取れます。

続いて第8話は、疎開を取り上げます。風太郎は、以前働いていた工場の上司であった方の家が目黒にあるのですけれども、そちらに下宿していたのですが、山の手空襲で被災しまして、上司の奥さんの実家である山形に疎開しています。このときに、旅館に疎開してきた都会の子供たちと出会った様子なども描かれていて、ここでは疎開を取り上げています。庭を掃除する男の子たちというのがいるのですが、実はよく見ると、使っている箒というのは簡単に枝を束ねて即席で使ったような箒です。写真26では、疎開先で家族からの手紙が届いて、先生から手紙を配られて、うれしそうな表情を浮かべながら読んでいる様子なども紹介しています。余談になるのですけれども、このとき風太郎さんは、その後の結婚相手の啓子さんとここで初めて出会っておりまして、日記には啓子ちゃんという可愛らしい女学生がいたと記されています。

第9話は、風太郎さんが通っていた東京医科大学は、7月から長野県の飯田市に疎開して授業を行うことになって、降り立った飯田駅で若い女性の駅員に出会った話などが書かれています。ここでは、戦時下の飯田の紹介と、出征する男性が年々増加する中で減少した労働力を補うために、中島飛行機や昭和飛行機の軍需工場で働く女学生たちの様子を紹介しています。

第1部の最後、第10話です。こちらが、終戦の日、8月15日になります。風太郎の日記には、「8月15日炎天、帝国ツイニ敵ニ屈ス」とだけ書かれているのですけれども、ここで靖国神社や皇居前広場に集まった人々、石川光陽撮影の写真ですけれども、写真は終戦の翌日になるのですが、そちらの写真2枚を紹介しています。また、第1話と対にして、ここでも石川光陽さんの日記に記されているものを紹介します。実は光陽さんの上司である警務課長が、今、皇居前に行ってきたのだけれども、みんな土下座して号泣しているよと。私も涙して戻ってきたところだと。記録の最後の1枚にあれを撮っておいたらどうかねという言葉に促されて、撮影に向かったようです。そういうことが、日記の中には書かれています。

ここまでが第1部になります。第2部については、風太郎さんと同時代を生きる男子学生たちの青春ということで、10枚の写真になります。例えば31番の写真は、旧制第一高等学校と第三高等学校の野球戦、あとは出陣学徒の壮行会や、勤労働員先の三井造船で熔

接作業を行う男子学生、学生同士で丸刈りにする様子や、建物疎開の作業を行う専門学校の男子生徒たちなど、10点の写真を紹介いたします。こちらで、写真展の概要は以上です。

会場では、先ほども申し上げましたけれども、8曲ほど、例えば昭和16年に発行された「なんだ空襲」や、『湖畔の別れ』の主題歌の「湖畔の乙女」といった音楽を流します。また、さらに関連展示として、5階の映像音響室のギャラリーでは、「山田風太郎の8月15日」と題して、複製原画を講談社さんから借りることになりましたので、そちらを御紹介したいと思っています。どうしても写真展では漫画見開き各1ページしか紹介できませんでしたので、8月15日は勝田文さんも力を入れたカラーページなどもありますので、そちらを通して読んでもらえるような展示にした原画展を開催する予定です。写真展のほうは以上です。

○櫻井補佐 ありがとうございます。それでは、本来であればここで質疑応答という形を取るところなのですが、先ほど波多野先生と回線がつながりましたので、波多野先生、もし回線がつながっているようでしたらお返事をお願いします。

○波多野座長 つながりましたか。

○櫻井補佐 大丈夫です。

○波多野座長 聞こえましたでしょうか。

○櫻井補佐 聞こえます。大丈夫です。

○波多野座長 すみません、回線の不具合ではなくて、近所に事故がありまして遅れてしまいました。すみませんでした。今、実施状況を御説明していただいたということですね。

○櫻井補佐 そうです。

○波多野座長 この実施状況については、ほかに御説明いただくことはありますでしょうか。特にないですか。

○櫻井補佐 一通り説明は終わったところです。

○波多野座長 そうですか。それでは、委員の皆さん、今の御説明について、何か御質問やら御意見がございましたらお願いします。

○松井委員 2点です。事前に言っていなかった点で申し訳ないのですが、1つは、特別企画展の「丈夫なからだ」という展覧会の食料事情についてです。これで見えていくと、小学生やこの時代のことを知らない子供たちが見ると、特に昭和10年代の後半に玄米が配給されていくのは、健康増進のためだと思われる危険性があるかなと思いました。結局、お米の配給についても、玄米でしか配給できない状況になっていったことをきちんと分かってもらうような説明が必要かなということと、配給で食料を得ることがどういうことなのかということ。いろいろ米穀通帳とかは展示しておられると思うのですが、お店で、スーパーで買うように簡単には食料が手に入らない状況が、特に昭和10年代の後半にはあることを、解説のどこかには押さえていただく必要があるのかなと感じました。ちょっと具体的な指摘ではなくて申し訳ないのですが、栄養のために玄米を食べるようになった

という、昭和 14 年のキャンペーンはそうかもしれませんが、昭和 17 年、18 年、19 年というのはそういう状況ではないですし、ましてや、お米以外のものを代用として配給されるような状況にもなっていくことがあるので、そこはちょっと御注意いただきたいと思います。

もう一点、写真展です。22 番の写真についてです。焼け跡で告別式をすることがどうということかについて、昭和 19 年に東京都が、今後空襲で遺体処理がいろいろ大変になってくることを鑑みて、ワンストップで、空襲が起こった所で警察と区の戸籍係とか、要するに、検死と火葬とか土葬の許可証と、それからお寺に御協力を頂いてお経を行うとか、そのようなことができるような条例を作ったのです。そういうことを解説に書くかどうかは別として、踏まえる必要があるかと思うので、これについては関係の資料を後でお送りしますので、是非、その辺、なぜ告別式がこのようにここで行われるのかの背景は、主催する方は知っておいていただきたいですし、片鱗でも説明があると一番ベストかなとは思っています。説明ができなくても、とにかく背景は知っておいていただきたいと思います。以上です。

○波多野座長 ありがとうございます。よく分かりました。ほかに、今の御説明についていかがでしょうか。

○神津委員 神津です。1 つ簡単なことをお伺いします。資料 1 で、運営実施状況のことを御説明いただいたのですが、11 ページに、昭和館のホームページとか SNS へのアクセスということがあったのですが、これが昨年と比べて伸びたのかどうかを知りたいのです。

○波多野座長 いかがでしょうか。

○井上総務部長 昭和館のホームページですが、昨年の 1 月末のアクセス件数は 21 万 1,723 件です。ですから、今年 1 月末は 18 万 8,983 件ということで減っております。SNS ですが、まず、昨年の同時期、1 月末と今年の 1 月末を比べると、Twitter は 1,119 件であったものが、今年は 1,517 件で増加しております。Facebook は昨年 1 月が 9,539 件であったものが、今年は 1 万 1,971 件。YouTube ですが、昨年は 9,476 件が、今年は 2 万 8,689 件で、いずれも SNS のアクセス件数は増加しております。私どもは、これは館内でも意見交換などもしておりますが、やはり新型コロナで来館については、特に小学生の団体が減っている。学校の方針もあると思いますが、国の方針等によってなかなか館に直接来られない状況がありまして、やはり SNS を利用してアクセスされる人が多くなっているのではないかと考えております。ホームページですが、昨年は夏の特別企画展で「この世界の片隅に」というちょっと話題性のある特別企画展をやったときに、ホームページのアクセスが急に増えたという状況もありまして、こちらは昨年よりも減っている状況はありますが、やはり SNS と同様に、来られない方がホームページにアクセスしながら情報を得ているという状況はあると考えております。以上です。

○神津委員 了解いたしました。ありがとうございます。付随してなのですが、感染症は今まで、それこそ結核とかいっぱいいろいろなものを被ってきた歴史があるわけで、それ

を昭和館の中では展示をされていると思うのですが、リモートの良さと、それから、リアルというか実際に博物館に、それこそ松井さんではないですが、博物館に行くことの効用が、今はちょっとまだ慌ただしいのできちっと精査できないですが、ある意味で、きちんと分けて考えなければいけない時期がそのうち来ると思うので、こういうデータをきちんとまとめておくことは重要なと思います。以上です。

○波多野座長 ほかにいかがでしょうか。

○上安平委員 幾つかあるのですが、1 つは、コロナ対策。休館からコロナ対策をして、感染予防対策をして徐々に広げている様子を伝えていただきましたが、コロナに関しては対策は功を奏したとお考えでしょうか。つまり、昭和館に濃厚接触とか、いらした方からコロナが発生したとか、そういう情報は入っていますかというのが1 つです。つまり、こういうことを続けていけば大丈夫だという自信が今、おありになるかどうかということです。

それから、3 月 13 日から始まる感染症予防についての企画なのですが、私は、これはとてもタイミングがよくて期待しています。一瞬、このテーマを聞いたときに、スペイン風邪かなと思ったのですが、スペイン風邪は多分、大正なのです。昭和は、これを読むと、感染症としては結核だったということが御説明でもよく分かるので、やはり人類と感染症の戦いは歴史上ずっと続いているわけで、今これをやることはとても大事なことだと思います。やはり、見ている人も、自分のコロナに対するいろいろなことを通して見ると、感染症の大きさ、大変さがより身近に感じられると思うのです。こういうことは、多分、開催までに時間がなくて大変忙しい思いで企画をまとめられたと思うので、またもっとやりたいとか、もっとこのようにいろいろ細かくやりたいということはおありになったかもしれないのですが、大胆に構成して企画を成立させたという御努力に、私はエールを送りたいと思っています。取りあえずそういうことです。

○波多野座長 ありがとうございます。何か昭和館側でございますでしょうか。

○井上総務部長 それでは、コロナ対策の功罪と言いますか、状況について簡単に御説明します。上安平委員が御心配の昭和館では、現在、濃厚接触者、あるいは検査で陽性という方は出ておりません。現状としては、日々、マスクの着用、手洗い等について徹底しております。それと、対策自体は、国が緊急事態宣言を発出、4 月、1 月で 2 回発出されておりますが、その前後で、特に厚生労働省とも綿密に協議をしまして、昭和館としては、博物館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン、それから、同様に、図書館におけるガイドラインもありますので、それらを基にして、取れる最大の防御策を取っているところです。

幸いにして、そういった予防を取るということは、入館者を制限するという裏返しになりまして、私どもとしては、なるべく入館者に多く来ていただきたいという思いはあるのですが、厚生労働省との協議も経まして、感染防止対策をまず第一にという対応をしてみました。今後も、団体の受入れも 10 月までは、年度で言いますと、4 月から 10 月までは

一切受け入れていなかったのですが、10月の初めから小学生団体も入館できるような緩和をしたところですので、私どもは、対策について自信はあるかという御質問については、できる限りの対策、万全を期して実施しているという面では自信はあります。ただ、今後、どういう結果が出るかというのは今後の対策、あるいは努力次第だと考えております。以上です。

○上安平委員 よろしく申し上げます。

○波多野座長 ちなみに、団体で入場者は10月以降あるのでしょうか。1日に何件ぐらい、あるいはどれぐらい減ったのでしょうか。

○井上総務部長 私どもの資料ですが、実施状況の資料の2ページを御覧ください。特に団体については、常設展示室で申し上げますと、小中学生の団体が1,717人、6月から1月までで入館いただいています。これは、学校数にしますと28校です。昨年1月末で見ますと、小中学生は2万2,185人入館いただきました。これを学校数で考えますと336校ということで、10分の1以下と言いましょいか、小学生でいきますと約9割減の状況ということで減っております。以上です。

○波多野座長 分かりました。やはり結構、減っているわけですね。ほかにございますか。

○増田委員 まずは、ただいま昭和館のコロナ対策は大変、御苦労があったというのはよく分かりました。全く私ども平和祈念展示資料館も同様であります。管轄は総務省であります。総務省からの一元的な指示もありまして、我々も3か月閉館を余儀なくされました。何とか再開できたとはいえ、本当に入場者数が数えるほどで、もう皆さん手持ち無沙汰と言いましょいか、氣力が空回りしてしまうことを、私の立場からすると、どうやってみんなの士気を高めたらいいだらうかと、それに心を配ったというのが正直な気持ちでして、今もそれは変わっていないのです。それは今日の御報告と直接関係がないことですが。

私に関心を持ったのは、資料1の18ページの語り部の件です。これはもう言うまでもなく、当時の関係者が老齢化して、実際、体験を基にした語り部さんが姿を消しつつあるという状況の中で、語り部育成は極めて重要な問題です。そういう中でこれを拝見しますと、7名ずつ、第2期生、第3期生という形で順調に進んでおられるようで何よりだと思います。そこで、7名の世代と言いますか、あるいは職種と言いましょいか、何かそこで特色なり御感想なり、また今、実際に研修をされて現場で活躍されているのでしょうか、実際それに携わってどういうことが1つの、感想と言いましょいか、意見としてなのか、それは我々、平和祈念展示資料館としても関心があるところですので、何かお話いただければということがまず1つです。

もう1つは、毎回、御報告を伺っていつも感心するのですが、厚労省の成り立ちという観点から、「丈夫なからだで病を防げ」と、こういう切り口にはいつも感心をしております。上安平委員も御指摘のとおりで、こういうコロナ禍という我々が直面している中で、是非、昭和館として取り組んでいただきたいのは、これを発展させるような形で、一体、こうした病原菌にどう日本社会が対応してきて、それを克服してきたのかという、やはり

戦前・戦中・戦後の1つテーマとして取り組んでいただければ大変幸いだと思っております。そういう意味では、たまたま私ども、終戦直後に中国広東から引揚船、アメリカのリバティ船で浦賀に向かっていた船の中でコレラが発生したという大変な問題が起こって、それをちょっとまとめたりもしましたが、そういう点も踏まえた病原菌対策を日本が、あるいは政府、厚生省を含めて、どういう対策を取ってきたのだろうかということは、今、国民が非常に大きな関心を持つテーマではないかと思っておりますので、是非、御検討を頂ければと、こういう要望です。以上です。

○波多野座長 貴重な御意見ありがとうございました。昭和館側で何かございますでしょうか。

○坂尻図書情報部長 語り部事業の御質問についてお答えしたいと思います。年代とか職種のお話がありましたが、今、1期生で活躍していただいている方がおります。年代で言うと、30代後半から50代後半ぐらいまでの間の方が活躍しています。私は12月から引き継いで、詳しいことが分からない部分もあるのですが、分かっている範囲でお答えさせていただけたらと思います。実は昨日も品川区立の小学校に一緒に行ってきました。その方は女性の方なのですが、ずっと読書アドバイザーというのを小学校でやっていらしたとおっしゃっていました。その方がなぜ語り部になったのかという中では、小学校に出向いて、朝のホームルーム前に読み聞かせというのをやるそうなのですが、例えば、平和についての絵本などでもすごく良い絵本があるのだけれども、ただ、これから学校生活が始まるよという朝の段階でちょっと重い話をするのは気が引けるということをおっしゃっていました。そのようなときにちょうど昭和館の語り部のチラシを見て、そういう事業の中でそういうことを話せるのならいいなということで応募したと伺っております。

それ以外の職種で、例えば気象予報士の方がいらっしゃいます。その方は40歳前半の方だと思いますが、TBSラジオで天気予報をやっていらっしゃる方です。テーマも「空白の3年8か月」といって、戦時中に天気予報ができなかったというのを題材にして語っていらっしゃいます。天気は若い人たちにもすごく身近な問題なので、その方が国立の音大か何かの中学校でお話したのを聞かせていただきましたが、天気予報というのをすごく身近に感じて、中学生たちも反応もかなり良かったということがありました。やはり若い世代の方が多いため、まだ体験された方が残っている中で、私たちが語るのはいいのかなというようなちょっとした悩みみたいなものは皆さんおっしゃるのです。そういう中で、例えば気象予報士とか、そういう特定のテーマみたいなところで掘り下げるのは1つの在り方としてはいいだろうなというのとか、あとは、昭和館でオーラルヒストリーを製作していますので、誰か数名を選んで、その方の体験を基に少しお話をするという形とか、今、ちょっと探りつつやっているところです。よろしいでしょうか。

○波多野座長 ありがとうございます。

○増田委員 どのぐらいやっていただくのですか。あるいは、月に何回ぐらい、1人の人が何時間とかそういうように決まっているのですか。

○坂尻図書情報部長 大体30分。皆さん1つのテーマで講話原稿というのを作りまして、それに基づいてお話をされるのですが、1つの原稿が大体30分です。小学校の授業が45分ぐらいありますので、その中で収まるような形で30分です。今、資料の中にも今年の活動の内容が入っているのですが、やはり今年はコロナでなかなか学校に行けないこともありまして、数はそれほど多くないです。週に何回もないです。今は月に1回あるかないかという状況です。

○増田委員 では、本職には影響がない、もちろんそういう中で。

○坂尻図書情報部長 そうですね。どうしても、働きながら参加している方は土日でない活動ができないということで、例えば昭和館の定期講話会というのを偶数月の第1日曜日に開催しておりますので、そこでお話を頂いたり、あとは、主婦の方ですと平日でもOKなので、小学校にはそういう方が行きます。

○増田委員 ありがとうございます。

○波多野座長 よろしいでしょうか。

○羽毛田館長 よろしゅうございますか。

○波多野座長 どうぞ。

○羽毛田館長 今、増田委員からお話がありました中で、平和資料館を運営なさっているお立場で、こういう状況下での職員の士気の問題や何かについてのお悩みを伺ったのですが、このことについては私どもも非常に心配をしております。長期化をしますと、そういうことについてどうするかということで、なかなか難しいではありますが、私どもの努力としては、1つは、こういう状況下でも、先ほど神津委員からもお尋ねがありました発信方法として、SNS等を活用した発信方法について今、どのようにできるか。それは、今の局面でどうできるかということと、お話のように、今後、全体の昭和館としての活動の中で、どのように恒久的にそこら辺りのやり方を考えていったらいいかという、両方のテーマがあると思うのです。取りあえずは、この局面で制約される中、どう発信をしていくかについては、できるだけ魅力のある情報源を作ることも含めて、やはり1つの努力ですし、それからまた、この時期はある意味、一生懸命そういう発信の方法を考えるにしても、なかなか制約があるとすれば、やはりこの時期を1つの仕込みの時期として、充実を図るという方向も考えていったほうがいいのではないかと考えております。

ということは、また、戦後75年を過ぎて、今でなければできない、あるいは、今だからできるということがいろいろあると思うのです。そういうことは、時を外さないように、今の時期、仕込みとして仕込んでおいて、またもう少し自由に発信できるときにはそれをいかしていくということでの充実と言いますか、館としての厚みという面で努力をすることも必要なのではないか。そういう意味では、先ほどの増田委員の御指摘にありました語り部なども、この時期でなければという要素はあると思いますし、また、オーラルヒストリーなども、時期を逃すと、当時を知る人の記録を取ることができない時期が来ると思います。

象徴的なことで多少、自慢めいて申し上げて恐縮ですが、実は、先ほどお亡くなりになった半藤一利先生のオーラルを私ども縁があって作らせていただいたのです。そうしますと、もう今、作ろうと思ったら半藤先生はいらっしゃらないわけですから、あの時点で作っておいてよかったなということなのですが、そういうことはいろいろな、正に今の時期にありますから、そういった面での仕込みと言いますか、館としてのこういう蓄えというものを、今まで以上に努力をするという局面でもあるかなということを考えながら、そうは言っても士気を維持していくのは正直、なかなか難しいところですが、みんな幹部一同、そのようなことを苦勞しながらやっておる状況です。ちょっと補足させていただきました。

○波多野座長 ありがとうございます。貴重な御意見でした。

○神津委員 すみません、ちょっとだけ、神津です。よろしいでしょうか。

○波多野座長 どうぞ。

○神津委員 短くです。発信の方法なのですが、写真展とか企画展などの御説明をしてくださった女性の方などは、ものすごく我がことのようにお話をなさっていたので非常に聞き入ってしまったのですが、現代とのすり合せというのがやはり大切なのかなとちょっと思いました。例えば、上安平さんがおっしゃっていましたが、感染症としては、ペストとかスペイン風邪から結核、そして新型コロナとあるわけで、その時その時でやはりいろいろな乗り越え方をしてきたので、今、新型コロナなので結核を取り扱うというのは非常に面白いと思います。松井さんがおっしゃった白米食の話、白米のことと食というのも実に大きなことですし、今、玄米が流行っていることと、その頃の玄米を食べようかという話とはやはり違うので、丁寧な説明が必要かもしれません。

それからもう1つ、企画展の中でちょっと思ったのですが、捨てていたものをいかに食べるかという展示もあったと思うのです。これも今、流行のサステナブルというか持続可能みたいなものとちょっとつながることもある。つながるけれども違うという、そういうものを今とすり合わせながら発信することは非常に大事なのではないかなと。ただ単に昔はこうでしたというだけでは、なかなか伝わりにくいのかもしれないなということを感じました。失礼しました。

○波多野座長 ありがとうございます。ほかに。ちょっと時間が押しておりますので。増田委員がおっしゃった最後のことなのですが、感染症対策に関するホームページと言いますか、展示があちこちでなされております。防衛研究所戦史研究センターでもやっておりますし、アジア歴史資料センターでもやっております、それらを何とか、それぞれ見応えのあるものなのですが、取りまとめることができないのかなと考えております。これは本日の話題ではないのですが、昭和の課題だと思います。それではよろしいでしょうか。それでは、頂いた御意見を踏まえつつ、昭和館において今後の運営に当たっていただければと思います。

続いて、議事2、本年度の、令和3年度の事業計画について、早速、お願いします。

○井上総務部長 それでは、昭和館より、資料2の令和3年度の事業計画について御説明

いたします。資料2の1ページを御覧ください。昭和館といたしましては、令和3年度も引き続き新型コロナの感染状況を考慮しつつ事業を進めていきたいと考えております。

1ページに記載の令和3年度昭和館運営事業予算は、現時点で、昭和館のほうで見込んでいる経費を令和3年度の所に記載しています。昨年同時期に見込んだ数字は令和2年度の所に記載しています。令和3年度の予算は、総額で約1,100万の減額になっております。大きな要素としては、歳出関係で管理諸費が約1,265万6,000円ということで減額となっております。これは設備というか、図書館の電動書架を修繕する経費を令和2年度に付けていただきました。その経費は1年度限りということで令和2年度に修繕が終わりましたので、その減額が約1,200万です。

続いて2ページです。2～3ページは、2で広報活動計画、3で来館促進対策、4で展示事業について記載をしておりますが、資料記載のとおり予定しております。

続いて4ページです。4ページには、特別企画展をこの夏の令和3年7月～9月に「昭和ポスターグラフィック～商業美術からグラフィックデザインへ～」の開催を予定しております。その下ですが、令和4年、来年の春から5月にかけて「SF・冒険・レトロフューチャー×リメイク」展ということで、今回開館できなかったレトロフューチャーの展示をリメイクして開催をしたいと考えております。そして、5ページに記載の巡回特別企画展については、令和3年度は兵庫県と島根県で開催を予定し、島根県では、しょうけい館、平和祈念展示資料館と3館連携の企画展を予定しております。

続いて6ページです。6～7ページには、5で資料収集について、6で語り部育成・活動事業について、7で情報検索システムの充実について、8で資料の公開・展示について記載しています。資料に記載のとおりです。

続いて8ページです。8ページについては、9で関係施設との連携、これは今後とも、しょうけい館や平和祈念展示資料館と連携を密にして事業を取り組むという内容のものです。10で運営専門委員会の開催ということで整理しています。

それから、参考として別紙8です。令和3年度の昭和館の運営事業計画表を一覧表にして整理しております。説明は以上です。

○波多野座長 よろしいでしょうか、ありがとうございました。今の御説明について、何か御意見や御質問がありましたらお願いします。

前に出たかもしれませんが、特別企画展とかを、例えば兵庫県と共催でやるというのがありますが、もし、コロナ禍などでできなくなった場合は、オンラインでもやるというような計画はあるのでしょうか。

○佐藤学芸課長 今年度も岩手や鳥取で開催できた状況もあり、今のところは現地での開催を予定しておりますが、今後の状況によっては、そういった方法も検討したいと思いません。

○波多野座長 今まではないわけですね。

○佐藤学芸課長 はい。全て現地で開催しております。

○波多野座長 ほかにいかがでしょうか。

○松井委員 松井です。よろしいでしょうか。

○波多野座長 どうぞ。

○松井委員 先ほどの SNS の件というかホームページでの情報発信なのですが、特別展に限らず、常設展の様子なども発信していただけると、なかなか東京に来られない方々にも伝わるのではないかと思います。展示全部を紹介するのは大変だと思うのですが、いろいろな館で、一部の所を説明するというようなもの、江戸博でもやっていますが、いろいろと例があるので、参考にして是非、常設展のほうもいろいろ見どころがあるかと思うので、その発信を御検討いただければと思います。

○佐藤学芸課長 館内でも SNS 等を通じての情報発信ということは議論も挙がっていますので、今後、常設展示や特別展示問わず、方法を検討していきたいと考えております。

○松井委員 よろしくお願いいたします。

○波多野座長 それでは、ほかに御意見がなければ、今頂いた御意見を踏まえた事業計画案となるよう御検討をお願いいたします。

それでは、令和 3 年度の事業計画案について、御異議なしということによりよろしいでしょうか。それでは、これを進めさせていただきます。そのほか何か御意見や御質問がありましたらお願いいたします。

それでは、昭和館の事務局、厚労省側の事務局におかれましては、皆様から頂いた御意見などについて、今後の運営にいかしていただければと思います。ほかに、事務局から何かありますか。

○櫻井補佐 それでは、委員の皆様におかれましては、3 月末で 2 年の任期が満了することとなります。事務局といたしましては、是非、皆様に再任をお願いしたいということで個別にお伺いしたところ、全員から御快諾を頂きました。つきましては、再任の手続きを取らせていただきますので、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。以上です。

○波多野座長 今お話がありましたように、引き続きよろしくお願いいたします。最後に、次回の開催予定ですが、基本的には、来年の 3 月上旬を予定していますが、改めて事務局から委員に御連絡をいたしますので、よろしくお願いいたします。

それでは、座長の私が遅れてしまったので申し訳ないのですが、長時間にわたり貴重な御意見を賜りました。ありがとうございます。これをもちまして、第 21 回目の昭和館の有識者会議を終了いたします。ありがとうございました。